

カナンの女の信仰

マタイ福音書 15章 21-28

(そのとき、) イエスは、ティルスとシドンの地方に行かれた。すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」 イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」とお答えになった。しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになると、女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」 そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」 そのとき、娘の病気はいやされた。

もう大分よくなったんですが家の飼い犬がクビのところがケガをして、軟膏薬を塗るのが大変です。犬は口が利けないので「助けてください」とはいわず、また薬を薬とっていないので嫌がって逃げ回ります。きょうのテキストにでてくる「どうかお助けください」というのはまったく正反対です。

<動かないイエス>

きょうのイエスさまはかなり冷たいです。女が憐れんでくださいと叫んでいるのにいっこうに動こうとはされません。無視しているかのようです。

イエスは何もお答えにならなかった。

また弟子たちがうるさくてうるさくてかなわないと思ったのか、それとも早く治すなら治すで追い払ってもらいたいと思ったのか、とにかくこのように

いいいます。

「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」

イエスはこのように答えます。

「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」

このようにイエスのカナンの女に対する態度はかなり冷たいものです。それではイエスはなんとも感じていないのかといえばそうではないと思います。女の母親としての情、子を思う気持ち、娘を思う気持ち、その何とかして欲しい、治して欲しいと願う気持ちを深く心に留めてはいるのですが、それに流されるということがありません。それだけではイエスは動かないのです。イエスの場合、生きる根拠というか、その立ち振る舞いの出処というのが、ただ人間の素朴な愛情だけではない、そういうところがどこかイエスにはあるわけです。またこうでないとその時その時の感情に流されてしまう、人間のあいだ、人と人の関係だけで、感情だけ、愛情だけで動いてしまうと、神と人、父と子の関係がうしろに廻ってしまう。置き去りにされてしまう。イエスにとって神と人との関係というのは「生きる」ことの根本にあります。だから、イスラエルの家の失われた羊という言い方もできます。

<呼応する女>

このイエスのことばに反応して女はひれ伏して、つまり跪拝（きはい）してこういいいます。

「主よ、どうかお助けください」

「イスラエルだけとは差別です」とか「あなたはできるくせにそれもしないでそれでもダビデ王の子ですか、娘には治る権利があります」なんてこのこのカナンの女はいいません。ただイエスを拝して「主よ、どうかお助けください」といった。イエスはまた答えてこういいいます。

「子供たちのパンを取って小犬にやっではいけない」

またまた、追い討ちをかけるように、きついことをイエスは言うわけです。対して女はこういいいます。

「主よ、ごもっともです」

本当にそのとおりです、と。このカナンカナンの女は娘のことで夢中になって大声をあげてイエスのところに飛んできたのにもかかわらず「ごもっともです」と言う。そのことが言えた女なのです。自分の娘を治したいという、しごくもっともな、その熱情からすべてを決めていくということでは、このカナンカナンの女はないわけです。「主よ、ごもっともです」といって、しかし、あなたにはそういう出てきた秩序を超えて、あるいは、秩序によってできた壁や垣根がありますが、その下を通過して、直接に響くということがあるはずで、
というのです。

だから、そういう、子犬にやるのはよくないというのはごもっともですけれど、

「しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」

あなたはただできあがった秩序というものにだけに寄りかかって、ものごとを言ったり言わなかったりなさい方でないことを、わたしは存じています、ということですから。どうかそのあまった力で、おありになるそういう力をお貸してください、
とこういっていったということなんです。

彼女は娘のことになると前後を忘れ夢中になって走って叫んできたのですけれど、一番底のところではイエスをよく理解しているのです。

だからイエスは驚いて

「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」

とこういっていったというのです。

お前はほんとうによく分かっている、こういう風にイエスがいった。そうすると、神さまから直に及んでくる癒しの力、イエスを通して及んでくる強力な波動が、パッとそこに及んでくる、そのとたんに悪霊が娘から出て行った、こういうことなんです。

そのとき、娘の病気はいやされた。

このカナンの女のテキストから「謙遜」「食い下がる祈り」「ユーモア」頓智などを学ぶということが言われていますが、まずはこの女、婦人がイエスをよく知っていた、理解していたということが第一です。この出来事があった時点で弟子たちよりもイエスをほんとうのところで理解していた。病氣治しの預言者以上のお方だとイエスのことがわかっていた、ということです。マタイ福音書には前にも「あなたの信仰があなたを救った」(9:22) 汝の信仰汝をいやせり、という箇所がありました。イエスはけっして自分を理解してくれる人、信じてくれる人を自分に隷属させるということはありません。あなたが、おまえが、受けたのだ、ということです。そのようにしてあなたが受けたものを、さらに伝えていけ、と。こういう風にイエスは言われるわけです。
